

## 限界集落

最近、限界集落(ゲンカイシュウラク)という言葉をよく耳にする。過疎化が進み、人口の50%以上が65歳を超えた高齢者ばかりになり、世代交代が困難になった集落や村落を示す言葉のようだ。日本の人口はあと30~40年も経つと半減しそうな状態である。となると過疎化も限界集落も30年で倍増するかも知れない。いや団塊の世代が交代することにより、若返りが進むのだろうか。ともかく現在の村落の高齢化を防ぐ手立てはあまり多くはない。従ってこまめに国民が協力しながら防止してゆく以外に方法はないのだろう。しかし「人口問題は住宅問題」(05-05)で取り上げたように、人口の減少が住宅問題と深く関わっていることは確かだと思う。しかも東京に隣接する埼玉県が最も人口の高齢化が進行しているという事実と向き合うとき、高額になりすぎた地価が、若い人口の流入を阻止しているとしか思えない。これは幼稚園や託児所の問題ではない。したがってこの人口減少を食い止めるには、住宅をいかに安く供給するかという問題とも絡んでおり、もはや給与がどうだの、景気がどうだのという問題をはるかに超えており、首都圏の大地主層の解体と、地価低下への法整備の方が重要ではないかと考えている。しかしこの住宅問題を解決する手法は、もちろん行政の責任ではあるが、現政権下では到底無理な話である。そこで企業ももう少し大胆に在宅勤務への決断を急ぐべきではなからうか。

★ ★ ★ ★ ★

一方、沖縄は戦中、戦後を通じて、日本の敗戦に伴う苦悩を一身に背負ってきた。そこで小生は基地問題もさることながら、沖縄への人口を集中する方法はないかと考えている。仮に沖縄の人口が倍増すれば、基地問題は政府にとって、もっと深刻な問題となるだろうし、『日米地位協定』に関しても改定せざるを得なくなる。と考えているからである。沖縄でギャンブルが出来るようにするなどというのは、論外で、まるでヤクザの発想である。むしろ小生は**沖縄を日本のハワイにすべきである**と考えているのである。その理由は、沖縄は寒暖の差が小さく、夏は32℃を越えることは稀で、冬は20℃を割ることは少ない。年間温度差は15度程度である。これに対して東京の温度差は30度以上になるからである。言い換えるなら沖縄は日本有数の**避寒避暑の地**であり、マリニレジャーは数多い。第一線を退いて、のんびりと余生を暮らすには実にいい土地なのである。しかも古くなって数百万円で購入できる家も多く残っている。この地へ移住しやすくなるようなルールを政府が率先して作るべきであると、小生は思っている。そのためには沖縄への永住が多くの人にとって都合のよい状態を作ることが、大事ではなからうか。併せていかに病院や交通等のインフラを整えてゆくかを真剣に考えるべきなのである。重ねて申し上げるけれど、

年金で暮らせる、日本のハワイを目指すべきであるというのが小生の信念である。そのためには65歳以上の人々に対する特権や、年金生活者に対する税的な優遇措置など、敬老精神の生きた沖縄を更に推進させるべきかと思う。

小生が勤務していた企業には沖縄支社があった。ここへ転勤で行った人間は3年経って東京へ戻るとき、たいそう辛い思いをしたという。もう30年以上昔の話ではあるが、当時沖縄は物価が安く、一晚二人で飲んでも5,000円でオツリがタント来たという。そればかりではない。食べ物は新鮮で美味しいし、一年の温度差は少ないし、海の眺めは最高だし、スキューバダイビングを覚えた彼は、もう東京へは帰りたくないと思ったというのである。

★ ★ ★ ★ ★

北海道へ転勤した同僚も同じだった。「札幌は2度泣きの町といわれている」んだと言っていた。東京から赴任するとき、北海道へ飛ばされたという暗い意識になって着任する。ところが任期を終えて、いざ東京へ帰る辞令をもらったとき、なんとなく心が重くなったと言う。正直、東京には帰りたくなかったと言うのだ。北海道の冬は確かに厳しいけれど、白一色の世界は、北海道で暮らさなければ分からないほど美しかったという。さらにこの冬が終わると、春のまぶしいぐらいの輝き、そして夏の爽快さは北海道だからこそ味わうことができる緑に満たされていたというのだ。そこには北欧の夏の白夜のような活気と同じような躍動感があったと言っていた。しかも冬はそれなりの準備が街全体に行き届いているから苦痛ではないと言う話だった。さらに冬の海産物は北国のお正月を、まるで竜宮城のように豊かにしてくれたという。そればかりではない。家賃を初め、物価の安さと大平原の心地よさは、北海道でなければ味わえない素晴らしさだったというのだ。

★ ★ ★ ★ ★

しかしこうした素晴らしい日本人の暮らしがある一方、地方のよさがあることを知らずに、都市近郊暮らしをする人間も少なくない。小生もその一人である。浦和に生まれて浦和で育ち、一時、都内のマンションで暮らしていたが、母が年老いたので浦和に戻ってみると、そこは小生の記憶にあるふるさととは遠く離れていた。ヒグラシを手づかみで採った林も、カブトムシを100匹も捕まえることが出来た森も、ザリガニやオタマジャクシが溢れていた田んぼも、そしてドジョウやコブナを取った小川も、今では影も形もない。それは日本が先進国となるために支払ってきた高価な代償であり、同時に子供たちが高等教育を受け、家族が平穏な日々を過ごすことを条件に、引き換えにした破壊だった。確かに今までの社会は、会社に近いということが、最も大事な要件ではあったのだが…。

★ ★ ★ ★ ★

しかし仮に**週休3日制**になっただけで、様相は一変するだろうと小生は考えている。というのは現在でも有給休暇と祝日を合わせると、ほぼ週休3日制に近い。もしかりに週にもう一日在宅勤務の日が増えれば、会社に通う日を均せば週3日ということになる。2LDKのマンション暮らしがいいか、200㎡の庭付き1戸建てがいいか迷うところではある。特に新幹線の通勤費も支給される企業であれば、通勤に1時間として、100キロ圏まで対象住宅地は広がる。東海道新幹線であれば、熱海や小田原、東北新幹線であれば那須、塩原、長野新幹線であれば軽井沢、上越新幹線なら沼田あたりまで通勤圏になってくるというわけである。

問題は学校と医療ということになるだろうが、これはお国の法律による優遇や規制、もしくは規制緩和ということになって来るのだろう。どうやってこうした機関を地方へ移すべきか、税法なり、商法なり、新しい条件なりを整えてゆくことしか方法はない。筑波学園都市が出来た当時は、大いなる無駄遣いと思われた新開拓都市だったが、今、行ってみると美しい町並みが広がっており、かつての投資が無駄ではなかったように見える。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

小生は正直言って、銚子市の市立病院が医師不足で閉鎖に追い込まれたことがあったが、この理由を理解できない。町の失政であったと考えているのである。銚子の漁港周辺はさておき、反対側の屏風ヶ浦の景色や戸川港の北側の戸川台地には別荘地も多く、大きな公園もあるなかなかの景観である。その北西には、銚子マリーナや千葉科学大学のキャンパスが広がる。しかも銚子は夏期32℃以上になる日は極めて少なく、冬期、5℃以下になる日もまた極めて少ない。つまり離島は別にして**関東エリアでは、最高の避寒避暑の町**なのである。ここの病院に勤務する医師たちのために広い住宅を確保して、何らかの優遇措置をプラスすれば、医師の確保は出来たのではないかと考えるのである。そしてこういう**避寒避暑の町は千葉県勝浦も同様**である。ここはすぐ沖合は深海になっているために、深海の水と混ざり合い、海水温はあまり高くならず、従って夏は涼しい。そして海際だから冬も暖かいというわけである。銚子市はなぜこの自然環境のよさをアピールして、医師の獲得に乗り出さなかったのか、まさに「灯台下暗し」のためだったのだろう。銚子にしかない資源を、もっと有効に使うべきだったと悔やまれるのである。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

かつて小生の親友で絵を描いている人間が、東京に家族を残して、福島県の大信村へ引っ越した。ここの村長をされていた方が隣に家を新築したため、古い屋敷が空き家になり、ここを**月3万円の家賃**で借り受けたのである。建坪は150㎡ばかり、庭も400㎡ぐらいはある家で、もちろん水洗トイレにガス湯沸かし器等が整っている。小生は毎年夏になるとここへ遊びに行ったが、

物珍しさもあってか、近所の農家の方が数人、夜になると尋ねて来られた。友人がここに住んで以来、知人になった呑み仲間である。呑み仲間といっても田舎のことだから、囲炉裏を囲んで、魚を焼いたり、ソバをゆでたり、近所の方々が持ち寄った農産物を調理する程度である。そして彼らは夜 10 時になると、必ず引き上げていった。それぞれに明日の農作業があつて、早寝早起なのだろう。ここで村の人たちと語り合っているとき、小生は東京人と村人との間のちょっとした違和感に出会った。この村には、まだあちこちに水車も残っており、ソバ畑も多い。東京人にとってはなかなか魅力的な景観である。ところが彼らはこれをむしろ時代遅れの遺物と考えている風であつた。大信村は間もなく平成の町村合併で白河市に併合されたが、[そこにはふるさとがあつた](#)。「[ウサギ追いしあの山、コブナ釣りしかの川](#)」的な、日本人の故郷の原風景が点在したところだったのである。しかし彼らはこれを誇りとは思っていない。むしろ時代遅れと考えているようなのである。そこには都会コンプレックスさえ感じられた。

小生はここに[限界集落の根源](#)が存在するのではないかと思つた。限界集落にブレーキをかけるには都会志向をどうやって払拭してゆくか、これが最も大事な要素かもしれない。しかしその一方で、もう一つ、[ふるさとに誇り](#)を持つことの大切さを小生は感じていた。たとえばこの村が日本で一番たくさん水車が回っている村となったらどうだろうか。そしてこれで発電もし、ソバを挽き、コーヒー豆を挽いているとなれば、東京人の見方も、村民のふるさとに対する考え方も変化してくるだろう。小生はこの呑み仲間に、もし大信村が日本唯一の村となったら、多分それだけでも観光客を集めることが出来るだろうし、もしかりに大信川の兩岸に 1,000 本の枝垂桜の並木があれば、それだけでも観光資源になることを予言した。しかしすでに白河市に合併されて、白河市のほんの片隅の集落へと変貌してしまつたことは、まことに残念である。

★ ★ ★ ★ ★

小生は、個人の手で何とかこの限界集落化に少しでもブレーキをかけることが出来ないか、最近頭を痛めている。そこで植物に頼ることが出来ないだろうかを考えてみた。町おこしをする際、過去の事例を見る限り、壮大な植物の公園を作ることが一番手っ取り早い方法だと悟っていたからである。季節の花には人を集める力がある。季節の変わり目を花が教えてくれる。河津桜も滝桜もコスモス街道も、笠間の菊もしかりである。植物の中でも小生は特に桜に注目している。桜は毎年我々の門出を祝福し、出会いの花でもあり、同時に別れの花でもある。何か我々が重大な決断をするとき、桜の花はその決意を密かに応援してくれているようにも見える。入学したとき、卒業したとき、そして入社したとき、ふるさとを出たとき、転勤したとき、この桜に見送られた方も数多いことだろう。

そこで限界集落で山田太郎君が誕生したと仮定して、村役場から桜の木を1本プレゼントしてはいかがかと考えている。それも苗木には『山田太郎の河津桜』というふうに立派なネームプレートをつけて。もし山田家の庭に桜を植えるスペースがなかったら、村があらかじめ用意しておいた公園なり川堤なり、村の共有地に植えてもらう。山田家では多分わが子と同様にこの桜を一生懸命育てるのではないかと期待しているのである。そして高校を卒業する頃になれば、この桜はかなり大きくなり、立派に花を咲かせてくれる。きっと太郎君が都会の大学へ通うようになって、またどこか他の地で就職しても、毎年この桜が満開になる頃には、お花見に我がふるさとへ返って来るように思う。いや無理に帰って来なくてもいい。しかし太郎君の心の隅に、きつとこの桜は永遠に生き続けることだろう。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

そして山田家に女の子が生まれたら、同じように立派なネームプレートをつけて枝垂桜を役場からプレゼントする。桜は成長が早く、50年でかなりの大木になる。しかもどんどん大きくなる桜もある一方で、せいぜい5mぐらいにしかならない桜も多い。天に向かって伸びる桜もあれば、横へ広がる桜もある。東京での生活に疲れ果てたとき、仕事がかまく行かなかったとき、人生の節目を迎えたとき、きつとみんな自分のネームプレートが付いた桜を思い出すことだろう。この企画が50年続けば、この集落はやがて桜の名所となり、今度は花見客がやって来て、立派な観光資源になってゆく。小生はこの試みをまず福島県の原発事故で苦難の道を歩んでいる11市町村で実行してみたいと考えている。そして茨城県の結城市にある『日本花の会』の桜見本園のご協力を仰いで、すでにささやかながら実行している。よしんば限界集落化を完全に阻止できなくとも、少しは減速させることは出来るような気がする。そして何年かの時間をかければ、また時代も変わって来るように思う。今のよう全員が塾通いするような歪んだ時代もやがてなくなって来るだろうし、パソコンの利用ももっと簡便になり、今始まったばかりの在宅勤務もきつと進展しているだろう。東京近辺の人口集中さえなくなって来れば、日本はまだまだ住みやすいところはたくさんある。東京人にしても、世界中の人にとっても、老後は海を見下ろす丘の上で暮らしたいというのが、一つの夢である。もう一度沖縄県に目を向けてみよう。沖縄県はその夢をかなり安価に実現できるエリアであろう。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

東日本大震災が起こった年の夏、軽井沢のアパートや賃貸家屋はすべて満室状態となり、別荘で空き家はないか、地元の不動産会社が探し回っていた。その理由は簡単である。東京の超高層マンションで暮らしていた人たちが、エレベーターが止まって大変な苦勞を味わい、せめて一年ぐらい地震が収まるまで、

平屋の家に住みたがったからである。その後、中軽井沢の西側の田園地帯の荒地が住宅開発されて、建売住宅がかなり出来た。ほとんどが 500 m<sup>2</sup>程度の敷地に 100 m<sup>2</sup>程度の住戸付きで 3 千万円程度が中心である。結構よく売れたようで、中軽井沢の西側では、ホームセンターや大きなラーメン店があちこちにオープンした。住人が増加すれば店舗も増える。心配なのは医療と考えている方も多からうが、現在の日本では、かりに医学部を優秀な成績で卒業しても、都市部で開業するには数億円かかる。駐車場が確保された土地に住宅と診察室と、さらには最新の医療器械を設備しなければならないから、そうそう簡単には開業できないのが実情である。このため医者の子は医者になるケースが増えていることも事実である。しかし首都圏から 100 キロを越えたこうした住人の増加しているところでも、マダマダ土地は余っているし、医者の開業資金も半分以下で済む。要はどうやってこうした新開地を全国に形成してゆくかということであり、これは政府のビジョンと各市町村の政策にかかっている。

★ ★ ★ ★ ★

残念なことに日本の役人は、問題が起こらなければ行動しない。しかし役人というのは今後、起こりそうな問題を、今のうちに対策しておくことが仕事なのである。そうして国家をいかなる方向へ導いてゆくかを考えることが最も大事な仕事なのである。政治家も同様であろう。たとえば 10 年以内に在宅勤務の日数を 2 日間増やすという政府の覚悟を宣言すればどうだろう。地価は下がり、都心から 100 キロ圏での住宅開発が進行するであろう。この開発地の中に、商店街と学校、病院等を整備する計画も付帯させるような条件にすれば、購入する者も一層の安心感が生まれる。いわば筑波方式である。いや、新開発地である必要はない。政策一つでシャッター街の並んだ町の周辺が、急に賑わいを取り戻してくるようにも思う。要は政府の覚悟と日本という国家を、今後どのように導いてゆくかという政府の指針にかかっている。我が国ではパソコンの所有率もまたその技術力も、残念ながら先進国のあいだでは圧倒的に低い。しかしパソコンの授業を増やせば、パソコンの技能集団を育てることにつながってくるだろう。そうなれば年金機構のように、パソコントラブルで、世間に迷惑をかける案件も減少するであろう。このほかの役所においてもパソコン能力不足から生ずる問題も解消されて、全体のスキルアップが期待できよう。役所内のコンピュータにウィルスが入って、国家の大事な機密情報を抜き取られることも減ってくることだろう。自分のビジョンは何も持たずに、ひたすら役人の作った原稿のアナウンサー業務しかできない『ホルムズ海峡安倍信三』には、無理な話ではあろうが、『安保法案以上に総合的に判断してもらいたい』ものである。口先しか動かすことの出来ない、安倍信三にももう少し、指先を駆使するパソコンの便利さと怖さを、しっかりと学んでほしい。